

全共闘文学論

祝祭と修羅

黒古一夫



仇祭と修羅



黒古一夫

黒古 一夫（くろこ・かずお）

1945年12月 群馬県安中市に生れる

1969年 3 月 群馬大学教育学部卒業

1982年 3 月 法政大学大学院博士課程（日本文学科専攻）修了

著 書 『北村透谷論』（1979年・冬樹社）

『小熊秀雄論』（1982年・土曜美術社）

『原爆とことば』（1983年・三一書房）

編 書 『日本の原爆文学』（全15巻，1983年・ほるぷ出版）

『宮嶋資夫著作集』（全7巻，1983年・慶友社）

『宮地嘉六著作集』（全6巻，1984年・同）

現住所 〒371-02 群馬県勢多郡粕川村女淵186-8

全共闘文学論 祝祭と修羅

1985年 9 月20日 印刷

1985年 9 月25日 発行

定価 1500円

著 者 黒 古 一 夫

発行者 竹 内 淳 夫

〒102 東京都千代田区富士見2-2-2

発行所 株式会社 彩 流 社

電話 03(234)5931 振替・東京 9-55239

印刷 鶴平河工業

製本 青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

0095-923-2900

祝祭と修羅／目次

序 章 全共闘運動と文学 7

- (1) 全共闘運動をへ書くゝとは 8
(2) そして、現在 22

第二章 風景としてのへ祝祭ゝ 29

―三田誠広の世界―

- (1) 関係への不信 『僕って何』 30
(2) 青春の挽歌 『帰郷』『野辺送りの唄』 39
(3) 擬制への嫌悪 『漂流記1972』 46

第三章 過去としてのへ青春ゝ 53

―星野光徳・高城修三・松原好之・山川健一―

- (1) 貧しさの中のへ熱い季節ゝ 『おれたちの熱い季節』 54
(2) 反近代のへ夢ゝ 『闇を抱いて戦士たちよ』『約束の地』 64
(3) 情念の行方 『京都よ、わが情念のはるかな飛翔を支えよ』 75
(4) へ風俗ゝへの溶解 『鏡の中のガラスの船』『水晶の夜』 81

第四章 全共闘・もう一つの△修羅▽ 91

―立松和平の全共闘体験―

- (1) 戦後的なるものへの抗い 『今も時だ』 92
- (2) 時代への負性 『光匂い満ちてよ』 99
- (3) もう一つの△修羅▽ 『遠雷』『歓喜の市』 107

第五章 △回生▽の夢・または反天皇制の視座 115

―桐山襲の世界―

- (1) △回生▽は可能か 『スターバト・マール』 116
- (2) 反天皇制小説 『バルチザン伝説』 124
- (3) △近代▽を撃つ 『風のクロニクル』 130

第六章 『全共闘記』の世界 137

―兵頭正俊の挑戦―

- (1) その構造 138
- (2) その思想 150
- (3) その意味―兵頭正俊とは誰か 157

第七章 へ革命∨を書くことの意味 165

―連合赤軍・反日武装戦線の「手記」「書簡」―

(1) へ革命∨への情熱 166

(2) 自己省察 『十六の墓標』『明けの星を見上げて』 173

(3) へ他者∨希求―へ作品∨としての「手記」「書簡」 180

終章 自己史の中の十五年 187

あとがき 204

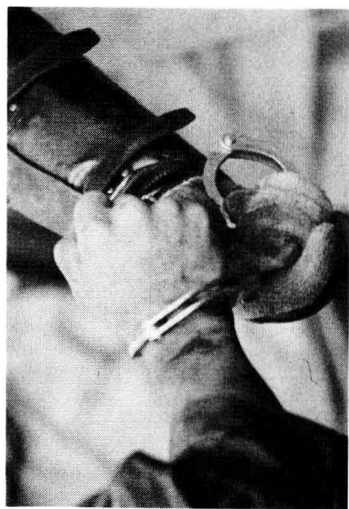
祝
祭
と
修
羅

序 章 全共闘運動と文学

(1) 全共闘運動をへ書くVとは

一九六八年の日大闘争、東大闘争を皮切りにして、六九年の初頭から全国いたるところの大学や高校を反権力闘争の坩堝と化し、七二年の「連合赤軍事件」を象徴的出来事として、その表相部分において完全に潰え去った学生叛乱＝全共闘運動とは、そもそも何であったのか。

すでに、あの時代から十五年近くが経とうとしている。この十五年という八時間Vを考えれば、消えていったもの、あるいは残ったものが錯綜して、「全共闘運動とは」という形で全体的に八総括Vすることは、至難のことだと思う。なぜか。それは、誰しものがあのような社会全体を根柢か



ら揺り動かした運動については、どうしても自分の△体験▽に引きつけすぎてしまいがちになるからであり、と同時にそのような体験主義的総括しか可能にしないほど運動が個別性と多様性を持っていたからである。全共闘運動は、客観主義的な論評を拒絶するものだったのかもしれない。だが、そうは言っても、全共闘運動を△総括▽する時の視点、および全共闘運動の画期性や特徴について最大公約数的に、その精神と感性の位相からとらえることは可能なのではないか、と思う。

まず全共闘運動を△総括▽する視点の問題であるが、これは総括する主体が運動のどの時期にかかわったかによって微妙なズレを生じることがある。つまり、全共闘運動は大きく別けて、六八年の日大闘争から六九年一月の東大安田講堂攻防戦を経て九月の京大時計台死守闘争までを前期、それ以降「連合赤軍事件」までを後期とすることができるわけだが、前半の運動が圧倒的に昂揚していた時期と、後半の権力の反攻を受けて潰走していた時期とでは、主体が運動から感受したものに、いくらかの相違があるということなのである。

運動の前期を経験した主体にとって、全共闘運動は一言で言って△夢の王国▽を遠望させるものだったはずである。なぜなら、この国の戦後社会の秩序との回路を自らの意志で断ち切った△バリケード▽の内側で、△自由な人間の祝祭▽が一瞬時であれ実現したことを自らの全身体性によって経験したからである。それに反して、運動の後期においては、バリケードの周辺に結集していた△政治的大衆▽の数も減り、運動の指導部も新左翼諸党派によって占められることによ

って党派の利害を優先させる形で運動が敗走していったため、熾烈な後退戦をたたかわなければならなかったからである。

△夢の王国△の経験相で総括するか、それとも△敗走△の苦闘相で総括するか、同じ全共闘運動と言っても、おのずから違いが出てくる。そして、このいくらかの（大きな・決定的な）相違は、また△敗北△した後のおのれの在り方をどのように対象化するのか、という現在の問題にもつながってくる。つまり、△敗北△した後、体制へ組み込まれることを意識的無意識的に良しとした者は論外として、△敗北△を真摯に受けとめて△沈黙△を決意したか、それとも△敗北△を認知してもなお△転戦△の可能性をさぐっていったか、によって全共闘運動のその姿形が違って見えてくるといふことなのである。

さて次に、全共闘運動の最大公約数的精神と感性とは何であったかであるが、これはまとめて言えば、理念的には「大学」を中心項とするこの社会の△近代Ⅱ戦後秩序△の否定であり、感性的には△自分の主人公は自分だ△ということの覚醒であった、ということになるだろう。このことは、全共闘運動が△政治革命△と△文化革命△の二つの要素の混淆した反権力闘争だった、とよく言われることと深く関係している。

主に国立大学でスローガン化された「大学解体（帝大解体）」は、まさしく当時の大学が△政治△そのものを具現する機構でしかないことを見抜いた△政治的大衆△の即時的対応の結果であり、「産学（軍学）協同路線粉碎」の言葉も、この社会における大学の役割を否定するものにほ

かならなかった。また、全共闘運動を象徴すると言われた「自己否定」へと到る思想と感性は、学生大衆一人一人が大学やこの社会における自分の存在を対象化したところに結実したものである。

そして、全共闘運動における△文化革命△的な要素という点から考えれば、全共闘運動は、△想像力のたたかい▽、つまり現実△社会を超えたところにかなる△夢の王国▽の建設が可能か、を真摯に追求した反権力闘争であったということになる。言葉を換えれば、全共闘運動は、バリケード空間の体験によって△革命▽へ至る道を想像力のたたかいとして正しく身体化した運動であったということである。したがって、△想像力のたたかい▽は、バリケードが撤去されたからといって消滅するものではなかった。△政治△的には敗北してもなお△想像力▽の問題としては屈服しない、そのような性格を全共闘運動は内在させていたのである。

ところで、そのような全共闘運動と、それを文学作品として△書く▽とは、どのような回路でつながっているのか。このことは、先にも少しふれた全共闘運動敗北後の主体の身の処し方と深くかかわっている。強権によってバリケードを追われた△政治的大衆▽の多くは、権力のシステムからも秩序派からも拒絶され、孤立化を余儀なくされたのが普通であった。ある者は、一切を放擲して旅に出たり、肉体労働者としてその日暮らしをしたり、またある者は絶望と虚無のうちに自殺したり、という具合であった。目前に広がる荒涼とした風景にたじろぎ、孤立無援のまま裸形で佇まなければならなかったのである。しかも、それは自らの裡に闘いのなかばで仆れた者

の影を抱きながら、であった。

したがって、彼らバリケードの周辺に結集していた△政治的大衆▽の敗北後に待っていたのは、△沈黙▽か、それとも少数派として運動の理念と感性をゲリラへと△転形▽させ、この国の中枢部へのテロリズムを敢行するか、あるいは自らの運動体験を相対化しつつ、消滅すべくもない△もう一つのたたかい△想像力によって現実を超える▽を持続させるか、のどちらであった。いづれにしても苛酷な自己情況を引き受けることには変わりなかった。そして、三つの方向には共通するものがあつた。流れる時間に抗して、堆積する体験の時間を凝視し、いかにこの現実を否定し超えるか、を生きつづける上での原点としたことである。

さてそれでは、△沈黙▽でもなく、さりとて△転形▽でもなく、六八―七二年の体験を△持続▽の相において生きることの証明とした△想像力のたたかい▽とは、具体的にどのような形で展開されたのか。このことについて網羅的に述べることは、全共闘運動を全体的に総括するのと同じぐらいに難しいが、最も見やすい形としては、芸術△表現の世界において、就中△文学▽の世界において、それは顕現した。

一九七六年に「文藝賞」、翌七七年に芥川賞を受賞した三田誠広の『僕って何』の成功以降、次々と発表され現代文学の一つの傾向ともなった、全共闘運動の△体験▽から生み出されてきた小説群、あるいは早くも一九七〇年に処女詩集『死者の鞭』（構造社）を出し、自らの高校時代からの全共闘体験を△言葉▽へと塗りこめた佐々木幹郎の仕事など、全共闘運動に内在した△もう一つ

のたたかいVは、政治から文学へのA転位Vというこの国の近代文学史に顕著なスタイルを表皮としてまといつつ、この社会および文学世界において決して小さくない意味を持ちつづけてきた。

星野光徳『おれたちの熱い季節』(一九七七年)、山川健一『鏡の中のガラスの船』(同)、高城修三『闇を抱いて戦士たちよ』(七八年)、立松和平『光匂い満ちてよ』(同)、松原好之『京都よ、わが情念のはるかな飛翔を支えよ』(八〇年)、三田誠広『野辺送りの唄』(八一年)、今井公雄『序章』(同)、帚木蓬生『十二年目の映像』(同)、桐山襲『バルチザン伝説』(八四年)、鈴木貞美『劔』(八五年)、などなど。そして、兵頭正俊の連作『全共闘記』(その一とその十二、六九〜八五年)。

右に掲げたもののほかにも、三田、立松、高城、星野、松原、桐山らは、全共闘体験にもとづいた他の作品も書いている。これらは、戦後文学史の流れの中で、語るべき自我の内容さえ無くなってしまったことを作品化しているとして、小田切秀雄によって「空虚(凝視)の世代文学」と命名された、主として三〇代作家の文学傾向の中でも独自の位置を占めている。七二年以降の「シラケ」状況を見すえながら、自分たちがA夢Vに向かってやみくもに走った姿を、これらの作品は形象化していたのである。

そして、それらの現象形態は、戦争―戦後体験を何らかの形で作品の内部に潜ませていたことによって「戦後文学」と呼称されたものにならって言えば、「全共闘文学(小説)」と命名してもよいのではないか、と思われるほどである。

さて、ここ十年ほどの間に数多く書かれてきた「全共闘小説」であるが、作品個々は作家固有のモチーフと異なる素材によって書かれているのであるが、作家が全共闘運動の△体験▽と向き合う態度の違いから、いくつかの傾向に分類することができる。

まず第一は、全共闘運動が多様であったが故に、そこで繰り広げられた人間の劇ドラマが小説の素材として十分に格好なものであった、という理由によるもの。三田誠広の作品がこのグループを代表する。

第二は、あの△体験▽の日々と現在との落差はどこから生じているのか。現在を相対化するためには、あの△体験▽の日々の意味を小説として問い直さなければならないのではないか、と考えた人たち。立松和平をこの人たちを代表する作家、と考えていいだろう。

第三は、この国の近代文学の歴史に何度となく現われている△青春の回顧▽という問題から、全共闘運動が△青春小説▽の舞台として選ばれたというもの。高城修三、松原好之、山川健一などの作品は、この典型である。

第四は、腐れ切って微動だにしないように見える△現在▽に対して、何とかしなければならぬとする思想が、全共闘運動の理念と感性を△精神のリレー▽として生かそうとしたところに生まれたもの。星野光徳、桐山襲の仕事がここに属する。

第五は、全共闘運動の重要な部分であった△想像力のたたかい▽の意識的具体的な実践として小説表現を選んだもの。これは極少数派であるが、兵頭正俊の持続する仕事为代表している。